私ね、
生まれてきてよかったよ

今日まで生きてきて、
本当によかったよ

はじめに

仏教者が関わる社会福祉活動などで、「ビハーラ」という言葉を耳にしたことはありませんか。「ビハーラ（Vihāra）」とは古いインドの言葉で、「安住」「寺院」などと漢訳されます。ビハーラには四苦八苦を抱えて生きる私たちが、身も心も安らかに生きるようにという願いがこめられています。

この言葉を使った活動が始まったのは一九八五（昭和六十）年のことです。それまでは、「仏教ホスピス運動」といっていたようです。キリスト教のチャプレン（病院付きの宗教者）の活動に触発された心ある仏教者たちが、老病死の現実に関わろうとしたことから始まり、その過程で仏教らしい言葉を模索するうちにこの言葉が定着しました。

私に引き寄せていえば、年を取るのも嫌、病気も嫌、死ぬのなんかもっと嫌、でもそれらの苦しみからは逃げることはできない。けれども、それでも生まれてきてよかった、生きてきたかいがあった、と思えることが「安らか」の意味するところだと考えます。

仏教は苦難の人生を生きる私たちの応援歌であると、私は考えています。老・病・死も私の人生です。ビハーラとは、医療や福祉と協力しながら苦である現実と向き合い、仏教を通してその苦を乗り越え人生の意

義を見出す助けとなる活動だといってよいでしょう。

大学院を卒業後、しばらくして鹿児島県に戻り、生まれ育った寺で僧侶として勤め始めた頃は、「お寺ってなんだろうな、人が死んだ時にお金を貰う仕事ってなんか嫌だな」と思っていました。しかしあらためて仏教を勉強してみると、昔の寺院では生きて悩み苦しんでいる人のために活動していた歴史を知ることができました。

私も僧侶として、生老病死に悩み苦しんでいる方に寄り添い、その一端でも分かち合えたら、悲しみの中にもほんのちょっと笑顔を取り戻せるお手伝いができたら、そんな思いでベッドサイドに足を運ぶようになりました。

この書籍では、そんな私の活動と、私が出遇ってきた方々との思い出をご紹介いたします。

長倉伯博

目次

6 はじめに
15 私の出発点 ～「坊さんだけは遠慮してくれ」～
19 お坊さんに聞いてほしかった
29 「死なせてくれ、殺してほしい」
45 あらゆる痛みと苦悩
71 僧侶は生前に、医療者は死後に関わりを
79 ご家族のケアも大切
111 お父さんカッコよかったよ
121 無二の親友の心停止まで
127 入院で自ら患者経験
135 沈黙の共有にも大切さ
143 そばにいてくれるということ
169 医療と宗教が自然に手を携える日を夢見て
177 おわりに

私の出発点

～「坊さんだけは遠慮してくれ」～

鹿児島市内の寺院の住職を務めながら、ビハーラ活動に携わっています。

私が、京都の西本願寺で開催されるビハーラ活動者養成研修会に応募したのが三十六歳の時でした。なんとなく参加したその研修会で、キリスト教のホスピス医や病院チャプレンをしている方々の講義を聴いて、胸に火をつけられて帰ったのです。

その数日後、折よく新聞で「鹿児島終末期医療について考える会」の記事を目にして、さっそくその連絡先に電話して参加したい旨を告げました。職種を問われ「僧侶です」と答えると、それまで愛想の良かった応対が急に暗くなり、

「すでに参加している患者さんや家族に尋ねてみるので、しばらく

待ってもらえますか」

とのことでした。不安な一週間を過ごし、あらためて電話すると、

「あなたが悪い人とは思わないが、患者さんやご家族が、坊さんだけはこの会に参加してほしくないというので、申し訳ないが遠慮してくれ」と言われました。縁起でもないと思われたのでしょう。医療と宗教との溝は深い、ということを知らされました。

それからも医療現場で活動していくなかで、いろいろなことを言われました。

「僧衣姿で来て、患者の容態が悪くなったらどうする」「葬式を増やしたいのか」「信者獲得のためか」「拝めば治るなどと吹き込まれて、患者

が医師の言うことを聞かなくなったら困る」「守秘義務は？」「医療の現場は国家資格を持つ者によって成り立っている。資格のない人間が来ても責任を取れないだろう」

等々、他にもあったかもしれません。

今となっては医療者との笑い話のネタですが、私の活動はこんなところから出発したのです。

お坊さんに聞いてほしかった